沢内探偵事件録　女子高生ストーカー事件

明智　ひな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
沢内探偵事件録　女子高生ストーカー事件

【Ｎコード】
Ｎ４０８１Ｚ

【作者名】
明智　ひな

【あらすじ】
東京都内某所にある、古びたオフィスビル。
そこに暮らす青年“沢内啓輔”と、その娘“優”の元へ、一人の女子高生が訪れる――。
彼女を苦しめる輩を、啓輔は突きとめる事ができるのか！？

はじめまして、明智ひなと申します＾＾お暇なときにでも、覗いていただけると幸いです♪

第一話

都内某所。古びたオフィスビルが立ち並ぶ一角に、彼は居る。

それは、一見普通の個人経営会社。精々数名の社員が働く、小さな会社だ。

ゆえに、此処を訪れる誰もが、最初に疑問を抱くという。

ここは本当に、数々の難事件を解き明かしたという、沢内探偵のいる事務所なのか――？　と。

狭い事務所のドアを潜ると、いつものように、強い煙草の匂いが鼻をつく。

長年過ごしていても、どうしても慣れないその空気に、優は顔をしかめた。

出入り口に繋がる応接室におり、悪臭の原因となっているのは、二十代中頃の青年。

室内の割合を大きく占める、ゆったりとした長椅子に腰かけながら、紫煙（しえん）をくゆらせている。

「もうっ……。パパ、また煙草？　事務所が臭くなっちゃうよ？」

「ん、ああ、優か。おかえり」

「おかえり、じゃないでしょ！」

青年――此処の事務所の主である沢内啓輔（さわうちけいすけ）は、愛娘の姿を認めると、まだ長いままであった煙草を、無造作に灰皿に押し付ける。

そうしてにこりと微笑むが、優に冷やかな視線を返されるだけであった。

「冷たいなあ……ほら、早く手洗ってこい。今日のおやつはシュークリームだぞ」

「本当！？　パパグッジョブ！　ナイス！」

おやつの事を示唆（しさ）されると、途端に優の顔がぱあっと明るくなる。

しかもシュークリームは少女の大好物なのだ。

優は慌てて手を洗いに、ぱたぱたと奥の部屋へと向かう。

そんな少女を目に追いながら、啓輔はやれやれと肩を竦（すく）めるのだった。

啓輔のたった一人の愛娘である少女、優は、今年小学校にあがったばかりの一年生だ。

そのくせ、探偵の娘であるという事に誇りを持っているのか、父親の真似事をして、推理小説やら、六法全書なんかを読み漁ってい

る。

テレビを付ければ、ニュースチャンネルや、渋い刑事ドラマなんかばかり見ている。

……とまあ、一般的な少女達と比べると、少々変わった趣味を持った六歳児なのであった。

「パパ～！　手、洗ってきたよ！」

ぱたぱたと優が駆け戻ってくる。余程楽しみなのだろう、目がきらきらと輝いている。

こういう所は、まだまだ子供なのだった。

「はいはい。それじゃ、ここで大人しく待ってろよ」

先程との温度差に苦笑しながら、啓輔は長椅子から立ちあがるのだった。

やがて啓輔の持ってきた包みは、銀座でも有名な店舗の物。

普段の食卓には絶対出て来ないような高級品に、優は目を丸くした。

そして、いつもより若干上擦った声で問いかける。

「こ、これって、洋菓子アミラの銀座本店限定高級シュークリーム

だよね！？　どうしたの、パパ？　こんな高級品」

「お前、おやつの事になると妙に詳しいな……ほら、輪島さんから貰ったんだよ。お前も覚えてるだろ？　この前の事件の依頼人。娘さんと一緒に是非――だってさ」

「輪島さん？　……ああ、あの恰幅の良いお爺さんか。勿論覚えてるよ！」

瞳を伏せながら思案すると、すぐに思い当たったらしい。

すっきりしたような顔をしている。

「あの人、資産家だろ？　お前がシュークリーム好きだって教えたら、贈ってくれたみたいだぞ」

「な、成程……」

かつて彼の依頼人であった輪島という男の邸宅は、確かに豪勢だった。

庶民である二人には高級品でも、彼にとっては、安い買い物なのだろう。

と、このように、小さい事務所に住まいながらも、輪島のような金持ちの客は数多い。

それほど、この事務所の評判は良かった。

客にとっては、少しくらい依頼料が高かろうと、名探偵の力添え

があったほうが良いに決まっている。

それらは全て、若くして聡明（そうめい）な啓輔の努力の賜物（たまもの）だった。

実際、初めて彼を見た時の依頼人の反応は大きい。

こんな若造に本当に解けるのか？　などという言葉を投げかける者も多いのだ。

「……優？　何ぼけっとしてるんだ？　早く食わないと、俺が食っちまうぞ」

「え？　あ、ああ……うん」

父の訝（いぶか）しげな視線を受け、優は目の前のシュークリームに小さく噛みついた。

途端、口中にクリームの甘味が広がる。サクッ、という音と共に、口の中でシューが溶けた。

さっぱりしすぎず、しつこくない甘さは、確かにそれが高級だという事を示していた。

甘いものはあまり得意でない啓輔も、薄らと目を細めている。

どうやら、彼のお眼鏡にもかなったらしい。

「結構旨いな。これ」

「そりゃ、スイーツ業界の中では、幻とまで呼ばれるシュークリー

ムだもん！　美味しいに決まってるよ！」

「ふーん。……ま、いつか機会があったら、また食べような」

「うん！」

いつの間にか、辺りには和やかな空気が流れ出す。

そんな時、来客を告げるインターホンが鳴った――。

第一話（後書き）

はじめまして、明智　ひなと申します＾＾

まだまだ駆け出し中の身で、駄作ばかりですが（汗）

読んでいただけるとうれしいです！

第二話

「ア、アポイトメントも取らず、急に押しかけてしまい……本当に、すみません！」

本当に申し訳なく思っているのなら、早く用件に入ってもらいたいものだ――と、啓輔は心の中で毒づいた。

先程訪れた来客は、未だ年若い少女。速水菜々（はやみ　なな）――都内有数の進学校に通う高校生と言っているが、普通の学生がこんな時間帯に居る筈もない。何か訳ありなのは、一目瞭然（いちもくりょうぜん）だ。

顔立ちは中々整っており、同じ年の頃の少年達からには人気があるのかもしれないが、生憎（あいにく）啓輔にその気は無い。

別段他に仕事があるわけでもないのだが、用件を話す訳でもなく、こう謝られてばかりいるだけでは埒（らち）があかない。

正直、かなり迷惑だ。

そんな態度が表れてしまっているのだろうか。少女は、先程から恐縮（きょうしゅく）してばかりだった。

「――ええと、お嬢さん。別に、怒っていませんから。そんなに、謝らなくても……」

「あ、えっと、す、すみませんっ！」

「……」

啓輔は心の中で、小さく溜息をついた。

と、そんな時――。

「あの、お姉さん……」

「ひゃっ！」

優がやってきた。

手には、お客様用のティーカップに淹れられた紅茶と、クッキーを載せたお盆を持っている。

「よろしければどうぞ」

そう言ってにこやかに営業スマイルを浮かべる優は、とても小学一年生には見えなかった。

実父である啓輔ですらも、あの、笑顔でシュークリームを頬張っていた少女と同じ人物だとは、信じがたい。

そう思うのは菜々も同じらしく、目を白黒させていた。

「え、えっと、この子は一体？」

「娘の優です。優、ご挨拶なさい」

「はじめまして。沢内啓輔の娘、優です。以後お見知りおきを」

「は、はじめまして。速水菜々です」

優がお盆を机に置き、菜々に手を伸ばす。

握手を求められているのだと察すると、菜々も、慌てて手を差し出し、手を握り返す。

「緊張しないでも大丈夫ですよ。パパ、秘密は絶対守ってくれますから！」

普段は絶対使わないような言葉使いと微笑みで、依頼人の緊張を解く。

優もまた、沢内探偵事務所を経営する事において、かかせない人物だった。

「ん……そ、それじゃ、そろそろお話しさせて頂いても、宜しいでしょうか？」

「あ、はい。お願いします」

口が重かった彼女にも、ようやく決心がついたようだ。

伏せていた顔をあげ、真っすぐに啓輔を見据える。

その瞳には、怯えの色が滲（にじ）んでいた。

「実は私――ストーカーに遭っているみたいなんです」

菜々は、ゆっくりとそう言った。

啓輔が口を開いたのは、少女の告白から、たっぷり三拍（さんぱく）ほどおいた後の事だった。

明らかに困ったような口ぶりで、少女に問いかける。

「……えっと、ストーカーって、あのストーカーですよね？」

「は、はい。特定の人に執拗（しつよう）につきまとう、あのストーカーです」

「……」

啓輔は、相手に気付かれない程度に眉根を寄せる。

確かに此処は探偵事務所で、探偵もいる。

しかし、“探偵”と一括りに言っても、その種類は様々だ。

頼るなら、警察やらもっと良い専門の探偵事務所があるだろうに――と、啓輔は、心の中で溜息をついた。

……いや、仕事にケチを付けるのは、宜しくない。

「や、やっぱり、天下の名探偵さんに、こんな事を依頼しちゃ、失礼ですよね……すみません」

啓輔のささやかな変化を感じ取ったのだろう。

菜々は、再び瞳を伏せる。気のせいか、目元には薄(うっす)らと涙すら滲んでいる……。

幾ら年を食っているとはいえ、啓輔も男。

自分のせいで、少女を涙目にさせてしまった事に、ちくりと良心が痛んだ。

心なしか、近くで控えている優からも、冷やかな視線を感じる。

「ほ、本当にすみませんでした。……私、やっぱり失礼しま――」

「待って！」

菜々が席を立とうとすると、それを制する声が聞こえる。

……優だった。演技なのか知らないが、目元が潤んでいる。

「大丈夫です！　ストーカーなんて女の敵、絶対にパパが捕まえてくれますっ！　だから、泣かないで下さいっ！」

「もう、いいんです。ありがとう、ございました」

そう言いながらも、菜々は未練がましい瞳で、啓輔を見つめる。

優の視線が、更に険しくなるのを、啓輔は感じた。

重たい沈黙(ちんもく)と良心の呵責(かしゃく)に耐えられず、啓輔は半ば諦め半分で頷いた。

「……分かりました。私なんぞで宜しければ――」

「やった！　菜々さん、パパ、引き受けてくれるそうです！」

「本当ですか!?　あ、ありがとうございます……」

その途端、二人の表情が綻ぶ。

……まさか、演技？　二人の突然の変貌に、啓輔は、そう思わざるを得なかった。

「それではまず、少し質問をさせて頂きます。優、お前は下がっていなさい」

「はーい」

純真無垢な笑顔を浮かべながら、優は奥の部屋へと入っていく。

守秘義務と言う奴だ。一応、被害者のプライバシーは守っているつもりらしい。

尤も、張り込みやら何やらにはついてくるので、あまり意味はないのだが。

優が奥の部屋へと戻るのを見届けた後、啓輔は、菜々を見つめる。

その表情は、先程とは打って変って、真剣そのものだった。

第三話

菜々に初めての彼氏が出来たのは、二週間ほど前の事だった。

相手の名は松浦秀樹（まつうらひでき）。陸上部の主将で、男女問わず人気者だ。

菜々の一目惚れから始まって、早数年。

秀樹からの告白で、菜々の片想いは終わりを告げた。

内気な彼女にしては、中々上出来といえるだろう。

二人は、幸せいっぱいの生活を送るはずだった。

そう。あの出来事さえなければ。

悪夢の始まりは、二人が付き合い始めた翌日の朝。

菜々が、学校に登校して来た時の事だった――。

「菜々、おはよ！」

「あ、ことちゃん！　おはよ」

学校の校門前。菜々は、親友の塚本琴音（つかもとことね）に声を掛けられた。

琴音はいつもより明るい笑顔を浮かべながら、菜々を見やっている。

それも無理はない。

菜々の恋を誰よりも応援してくれたのは、他でもない、彼女だったのだから。

「菜々、昨日は本当おめでと！　お幸せにね！！」

「あ、ありがと……」

そう言いながら、菜々は小さく俯く。恥ずかしいのか、顔は真っ赤に染まっていた。

「そういえば、朝は一緒じゃないの？　昨日は、あんなにラブラブに帰ってたくせに！」

「も、もう、そんなんじゃないよ！！　ほら、秀樹君って陸上部じゃない。朝練早いから、朝は一緒に行けない、って」

「成程（なるほど）、ね。菜々ったら、めっちゃ愛されてるじゃん！　うらやましいね～」

「ち、ちが……そんなんじゃないって！」

「あはは。ゴメンゴメン」

そんな他愛ない話をしながら、二人は玄関へと入っていく――。

それは、どこにでも売っているような、普通の茶封筒（ちゃぶうとう）だった。

ラブレターにしては随分色気のないそれを見た時、菜々は思わず眉を顰（ひそ）めてしまう。

そんな菜々の様子に気付いたのだろう。琴音が、いつもより少し不安げな声で、問いかける。

「どしたの？　菜々、その封筒……」

「分かんない。何か、下駄箱に入ってたの」

「ふーん」

琴音にも、それがラブレターには見えなかったらしい。

思わず二人して、封筒をまじまじと凝視（ぎょうし）してしまう……。

「――何、入ってるんだろ？」

「そんなに厚みがある訳でもないしね」

菜々は訝しげに封筒を開ける。中には――一枚の、紙が入っていた。

封筒と同様、色気の欠片もない真っ白な紙。

三つ折りにされているのか、傍目（はため）では、何が書いているのかはうかがえなかった。

カサ――。菜々は、恐る恐る手紙を開ける。

何か、嫌な予感がした。

「えっ！？　な、何よ、これ……」

「嘘（うそ）、でしょ……？」

菜々は、怯えた顔で親友を見やる。

紙面に刻まれているのは、ワープロで打たれた赤い文字。

そこには、“松浦秀樹と別れろ”と、書かれていた――。

気が付くと、菜々は泣いていた。

余程辛かったのだろう。肩が小刻みに震えている。

「それを見た瞬間、私、もう頭の中が真っ白になっちゃって……。彼が人気者で、こういう事はありえる、っていうのは分かっていたんですけど――」

「……脅迫状（きょうはくじょう）、ですか。それだけでも、充分犯罪ですね」

それを聞きながら、啓輔は内心身震いしていた。

女というのは、些細な嫉妬心でも、ここまで残酷になれるものなのだ――と。

その内優も、こんな恐ろしい事をしでかさないだろうか、という考えが頭を過る。

いや、あのお気楽少女に限って、そんな事……。

「さ、沢内探偵？　どうされたんですか？　顔、真っ青ですけど……」

「――いえ、すみません」

啓輔は一つ咳払いをし、馬鹿な考えを頭から追い払う。

依頼人を信じる筈の探偵が、自分の娘を信じられなくてどうするのだ――。

「被害は、他にも？」

「は、はい。……こんなの、まだ、序の口だったんです」

そう言うと菜々の表情が再び暗くなる。

一度は止まったかと思われた涙が、再び戻ってきたようだ。

瞳の淵には、雫が溜まっている。

「……本当の悪夢が始まったのは、その晩からの事でした――」

その晩、菜々は落ち込んでいた。

どこか様子のおかしい菜々を、秀樹も色々と気にかけてくれたのだが、まさか当時者に相談するわけにもいかない。

訝しげな彼の言葉にも、曖昧（あいまい）に微笑むしかなかった。

「あたし……どうしよう」

菜々は、自室のベッドに飛び乗り、盛大に溜息をつく。

自分は、れっきとした彼女なのだ。

脅迫なんかに怯まないで、堂々としていればいい。

分かってはいるのだ。……ただ、そう振舞（ふるま）うのは、内気な菜々には中々難しい。

もしかしたら、自分は彼に相応（ふさわ）しくないんじゃないか――とまで、思ってしまう。

菜々は思考の悪循環に陥っていた。

と、そんな時。

部屋中に、聞き慣れたケータイのコール音が鳴り響く。

菜々は慣れた手つきで、通話ボタンを押した。

「もしもし、菜々ですけど」

「――」

「え？　すみません。もう一度お願いします」

相手の言う事が、いまいち聞き取れない。

電波の状況が悪いのかと思い、一度アンテナを確認するが、きちんと三本立っている。

「もしもし。どちら様ですか？」

「――」

それでも電話は、うんともすんとも言わない。

きちんと通話時間が表示される事から、壊れている訳ではないらしい。

「……もしもし？　貴方、一体――」

ブチンッ！　突如、乱暴に電波が途切れた。

どうやら相手が切ったらしい。全く、一体何の用だというのだ……。

「もう、一体誰が……っ！」

かけなおそうと、着歴を見た時、菜々は、背筋が凍るのを感じた。

非通知。受信歴には、そう刻まれている。

菜々はようやく、それが無言電話だったのだと気付いた――。

第四話

無言電話に脅迫状。

昨日起こったばかりの出来事で、菜々の頭はいっぱいになっていた。

今日も、昨日と同じくらい――いや、昨日より酷い気分だ、と菜々は思う。

この事を、秀樹に相談しようと、何度考えたことだろう。

しかし、ただでさえ陸上部主将という立場で、ストレスを抱えているというのに、さらに心配事を増やしてはいけないだろう……という複雑な思いから、どうしても言いだせないのだ。

「――み、速水。呼ばれてるぞ」

「……え？」

隣から困ったようなクラスメートの囁き声（ささや）が聞こえ、菜々は今、授業中だという事を思い出す。

前を見やると、厳格な事で評判の数学教師、青木（あおき）が頬を引きつらせている。

それを見た瞬間、菜々は一気に現実に引き戻された。

「速水。何、ぼけっとしているんだ？」

「す、すみません！」

慌てて謝るが、彼は相当ご立腹のようだ。目が全く笑っていない。

「余程俺の授業が退屈らしいな。いい度胸だ、速水。この後、職員室でゆっくり先生とお話ししような」

青木は、“ゆっくりと”の部分を特に強調して言った。

昼休み。菜々がこっぴどく叱(しか)られた後、職員室を出るとそこには見慣れた姿があった。

……秀樹だ。

壁(かべ)に寄りかかってどこか遠くを見る様な目をしていたが、菜々が帰って来た事に気付くと、ゆっくりと視線を向けた。

「秀樹君？　どうしたの、こんな所で……」

「ん、ああ。菜々が、青木に説教くらってる、って聞いてさ。どうしたのかな？　って思って」

そういいながら秀樹は、にかっと爽(さわ)やかな微笑みを浮かべる。

昨日の事も含め、少しブルーだった菜々にとってその笑顔は、とても安心できるものだった。

「昼、まだだろ？　一緒に食べようぜ」

「え？　秀樹君、お昼まだなの？　だって、もう昼休み始まって、随分経つよ……」

現時刻は、一時過ぎ。昼休みが始まって、三十分ほど経っている。

流石に、この時間までお昼抜きは辛いものがあるだろう。

男子の秀樹なら、普段は食べ終わっている時間帯のはずだ。

「ばーか。大事な彼女が怒られてんのに、一人で飯なんか食える訳ないだろ。早く弁当とって来いよ。ここで待ってる」

「あ、ありがと……」

秀樹の精一杯の優しさに、菜々は心が温かくなる。

今なら少しだけ、昨日の事すら忘れられる気がした。

駆け足で教室までの道を往復して、早五分。

菜々が職員室前に戻ると、そこには二人の人影があった。

一人は言うまでもなく、菜々の愛しの彼氏である秀樹。

もう一人は……陸上部のマネージャーの少女だ。名前は確か、菱本舞花――。

クラスメートで、幼馴染（おさなじみ）であるという二人は、仲睦（なかむつ）まじげに立話をしていた。

「あ、菜々。お帰り」

そのうち、秀樹が菜々に気が付く。

舞花への視線をそらし、菜々に微笑みかけた。

「じゃ、舞花。俺、これから昼だから」

「秀樹……あんた、まだお昼食べてないの？　あっきれた。今の今まで、何をしていたのやら」

舞花は大袈裟（おおげさ）に肩を竦（すく）めてみせる。

その様子は、二人の仲はかなり親密だという事をうかがわせた。

「まあな。行こうぜ、菜々」

「うん」

……その時、菜々は、背後から冷たい視線を感じ、咄嗟（とっさ）に後ろを振り向く。

そこには、先程までの朗（ほが）らかな笑顔とは対照的に、感情の読み取れない無機質な表情を浮かべた舞花がいた。

秀樹と仲良さ気に歩く菜々を、じっと睨（にら）みつけている。

「菜々、どした？」

「あ、ゴメン。今行くね」

思わず止まってしまった菜々に、秀樹が声を掛(か)ける。

歩きながら、もう一度後ろを振り向くと、舞花の姿は既(すで)に消えていた――。

数分後。二人は屋上の隅(すみ)に腰を下ろす。

いつもは定番のお昼スポットであるここも、時間が時間なだけに人っ子一人いない。

二人の貸し切り状態だ。

「――で、菜々。どうしたんだよ……いつも真面目なお前が、青センに怒られるなんて。本当、珍しい事もあるもんだよな」

「ん、ちょっと、考え事してて……。その時、ちょうど指されたみたい」

「あ～あるある。あの先公、人が考え事してる時とかに限って指してくるんだよな。俺もよく怒られる」

「秀樹君の場合、真面目に授業受ける気が無いのが原因じゃない？」

「はは、バレた？」

他愛ない会話を交わしながら、菜々は持参の弁当箱を開ける。

両親が共働きの彼女は、お弁当もお手製だ。

ちなみに、秀樹の昼は購買で買ったパンだ。

ペットボトルのお茶で喉を潤しながら、焼きそばパンに齧りついている。

「――でさ、菜々。お前、本当どうしたの？」

「え？」

いつの間にか、和やかなムードは吹き飛んでいた。

あまりにも突然の変化に、菜々は少々面食らう。

「青センが機嫌悪いのはいつもの事だけど……。お前、昨日から様子変だよ？　何かあったの、ばればれ。無理に、とまでは言わないけど、相談くらいならのってやるし。……それとも、俺じゃ頼りにならない？」

「そ、そんな事……！」

秀樹は、酷く傷ついた顔をしていた。

第五話

出会って数年。彼の、こんなにも悲しそうな顔を見るのは、初めてだった。

真剣な秀樹の眼差しに耐えきれず、菜々は目を伏せる。

そんな彼女を許さない、とでもいうように、秀樹は菜々の頬に手をやり、無理矢理目線を合わせた。

「目、反らすなよ。そんなにやましい事、隠してるわけ？」

「ち、違うよ！　私、そんな事……」

「じゃ、何で話してくれないの？　昨日からずっと上の空だし。何考えてんの、菜々？」

秀樹が心の底から心配しているのは、菜々にも伝わった。

しかし、本当に話していいのだろうか？　本当に、迷惑にならないだろうか……？

菜々の心は、揺れていた。

そんな戸惑いを感じ取ったのだろうか。不意に秀樹が、ふっと微笑む。

「俺の事気にしてんなら、大丈夫だから。俺、お前がそんな顔してんの、見たくない」

「秀樹、くん……」

「だから、話して？　辛いなら、我慢すんなよ」

その言葉が、菜々の心を溶かす。

菜々の頬に一筋の雫が流れおちると同時に、堰を切ったように、言葉が溢れだした――。

全てを話し終えると同時に、菜々は、心が軽くなるのを感じた。

秀樹は黙って聞いていたが、菜々が言い終えると同時に、そっと身体を引き寄せる。

「菜々。こっち、向いて」

「え？」

秀樹の言葉に少し驚きながら、菜々は、涙で濡れた顔を向ける。

その瞬間、額に軽い痛みを感じる。どうやら、デコピンをくらったようだ。

「いたっ……な、何するの――」

「何でそんな大事な事、今まで黙ってたの？　俺、そんな信用ない？」

秀樹の頬は、小さく膨れている。少し、機嫌が悪いようだ。

「ご、ごめん。秀樹君、陸上部の主将もやってるし、色々大変なのに、私なんかのせいで心配事増やしたくなくて」

「ばーか。好きな女の子が悩んでるのに、心配しない男がいるわけないだろ？　もし、これからもこういう事があったら、絶対相談してくれよな？」

そう言うと、秀樹は小さく微笑む。

しかし、その笑みはすぐに真面目なものへと変わった。

「……で、話を戻すけど。菜々、それ立派な犯罪だよな？　脅迫罪だっけ？　俺、警察に言った方が良いと思う」

「警察？　だ、だって、たかがこんな事で――」

「じゃあお前は、“たかがこんな事”にそんなに悩まされてたのか？　脅迫状は？　ちゃんと証拠もあるなら、警察だって動いてくれるだろ」

「でも――」

「帰った後、一緒に行こう？　被害者はこっちなんだし、そんなに邪険に扱われる事もないだろ」

秀樹は、人を安心させる笑みを浮かべる。

少し躊躇(ためら)いがちに、菜々は頷(うなず)いた。

「ただいま」

菜々は小さく呟きながら、家の扉を開ける。

その声に、返ってくる言葉はない。

両親が共働きで、尚且つ放任主義で帰りも遅い為、菜々は実質一人暮らしも同然だった。

警察署からの帰りの為、いつもより帰宅時間は遅めだ。

秀樹の言うとおり、被害者にあたる菜々は決して邪険には扱われなかった。

鞄(かばん)の奥底に入りっぱなしになっていた脅迫状を見せると、身辺警護の強化を約束してくれた程だ。

“また何かあったら、すぐに来て下さい”

最後に優しく伝えられた言葉が、未だ菜々の耳に残っていて、離れない。

「やっぱり、行ってよかったな。秀樹君に、明日ちゃんとお礼言わないと……」

心配してくれる秀樹や琴音達のおかげで、菜々は昨日の事にも、大分立ち直れつつあった。

と、そんな時。再び、携帯がコール音を鳴らす。

菜々はディスプレイを覗き、発信者の名前を確認する。

発信は――非通知。

「……もしもし、菜々です」

「――」

昨日と同様、相手は何も言わない。

同じ相手……ストーカー犯だ、と菜々は確信する。

先程までとは違う、落ち着いた、冷静な口調で菜々は言う。

「もしもし。……よく、聞いて。私は、あなたなんかに屈しない！　あなたがどんな姑息（こそく）な手を使っても、絶対秀樹君とは別れないから！」

ブチンッ！　今度は、菜々が乱暴に電源ボタンを押してやる。

久々にすかっとした気分になった。

「私は、こんな奴に負けない……。絶対、負けないんだからっ！」

同じ事を口にすると、段々と勇気が満ち溢れてくるのを感じる。

菜々は、名も知らぬ相手に、絶対に屈しない事を誓（ちか）った。

だが彼女は知らない。その誓いは、数日後には跡形（あとかた）もなく崩れ落ちてしまう事を。

彼女を苛（さいな）む悪夢は、まだ続く――。

第五話（後書き）

※第三話の文章内におかしな部分があったので、一部改訂させて頂きました。

物語の内容には全く差し支えないので、読みなおされなくても大丈夫です！

今後とも、沢内探偵事件録を宜しくお願いいたしますm（＿＿）m

第六話

翌朝。菜々がそろそろ登校しようかと思った頃、来客を知らせるベルが鳴った。

菜々はインターホンのモニターを覗きこみ、来客を確認する。

――琴音だった。菜々が見やっていると気付くと、小さく手を振る。

「ちょっと待ってて」

一言声を掛けてから、菜々は急いでコートを羽織り、鞄を手に取る。

もう少し経ってから行こうと思っていた菜々にとって、突然の来客はかなり驚きだった。

「ゴメン、待ったよね？」

「ううん。私こそ、急に来ちゃってごめん。ほら。菜々、最近色々あったじゃん。だから、朝くらい一緒に行って、話聞こうと思ったんだけど……迷惑、だったかな？」

琴音は、少し困ったように笑う。何の連絡もなしに訪れた事に、罪悪感を抱いているようだった。

彼女の家だって、菜々の家から決して近いわけではない。

遠回りをする、とまではいかないが、かなり余計な時間をくった筈だ。

そんな心遣いさえも、今の菜々には有り難かった。

「ううん。……私なんかのために、ゴメンね？　気遣ってくれて、ありがと」

「気遣ってなんかないって。私、菜々の傷つく顔が見たくないだけ」

「ありがと」

“俺の事気にしてんなら、大丈夫だから。俺、お前がそんな顔してんの、見たくない”

琴音の言葉に、不意に既視感を覚える。昨日の事を思い出し、菜々は思わず、ふわりと微笑んだ。

「どうしたのよ。菜々、今日は随分元気じゃない」

「ふふ、……実はね――」

少し照れくさかったが、菜々は、昨日あった出来事を琴音に話す事にする。

微笑みながらのろけ始める菜々の話を、琴音は、曖昧に微笑みながら聞いていた――。

話し始めて、どれくらいの時間が経っただろうか。

気がつくと二人は、学校に到着していた。

今まで、黙って菜々の話に耳を傾けていた琴音も、流石に苦笑しながら口を挟(はさ)む。

「菜々ったら、本当松浦君に首ったけね。あんたみたいな彼女持てて……松浦君、本当幸せ者なんだから」

「そ、そんな事ないよ……！！」

菜々は照れ隠しに首を振る。頬(ほお)が真っ赤なのは、寒さのせいだけではないだろう。

そんな他愛ない会話すらも、本当に楽しかった――。

彼女達の会話が聞こえてきたのは、本当に偶然だった。

休み時間。菜々が用を足し終え、個室から出ようとした時――一人の少女の声が聞こえたのだ。

「ねえ麻美(まみ)、松浦君に彼女出来たって噂、本当なの？」

「らしいよ。しかも、相手は舞花じゃないんだって……。あたし、

本人から聞いたもん」

「マジで!?　舞花と松浦君って、付き合ってたんじゃなかったの？」

どうやら三人グループのようだった。

声に聞き覚えが無い事から、恐らく他のクラスの女子なのだろう。

生徒数が多いこの学校なら、決してあり得ない事ではなかった。

そして――噂の中心は、菱本舞花。出ていける状況ではなく、菜々はその場に立ち尽(つ)くした。

聞きたくない！　という菜々の心情とは裏腹に、少女達の雑談は続いていく――。

「だって舞花って、松浦君追っかけてこの高校入ったんでしょ？　ぶっちゃけ、元々そんなに頭が良いわけでもなかったらしいよ」

「陸上部マネだって、松浦君目当てで入ったらしいしね」

「それが本当だったら、舞花めっちゃ可哀想(かわいそう)じゃん！」

「小学校からの幼馴染だっけ？　健気(けなげ)だよね～」

少女達の一言が、菜々の心に深く突き刺さる。

……そして、それと共に湧(わ)きあがる疑念。

ストーカー犯人って、もしかして――。

よく知らない人に対する勝手なイメージに、菜々は嫌悪感を覚える。

……しかし、有り得ない話ではないのだ。

陸上部で朝練がある彼女なら、早朝のうちに脅迫状を忍び込ませておく事くらい、可能かもしれない。

非通知で電話する事だって、別に難しい話ではない。

電話番号をどうやって知ったのかは問題だが、そんな物は、友人達にそれとなく聞けば済む話だ。

秀樹君に、相談しなきゃ……。

少女達が立ち去った後も、菜々の頭の中は、菱本舞花の事でいっぱいだった――。

昼休み。菜々は、休み時間思った事を打ち明ける為、秀樹の教室へと向かった。

これまでも、彼と共に昼食をとった事は何度かあったが、内気な菜々から誘うのは初めてだった。

少し緊張する。

やがて教室に辿りつくと、菜々は恐る恐る辺りを見回す。

見慣れない顔ぶれの中に、彼は――いた。仲が良いのであろう男友達と談笑している。

舞花と話していない事に、菜々は少しだけほっとする。

人ごみの中に、彼女の姿は見えない。

恐らく、他の友人達とお昼を食べに向かっているのだろう。

菜々は、扉近くで談笑している男子グループに向かって声を掛ける。

「あ、あの――松浦君、呼んで貰えませんか？」

「あんた、秀樹の彼女？　秀樹～！　お前の愛する彼女が来てるぞ～」

グループの中心格らしき少年が、クラス中に呼びかける。

その瞬間、教室中にくすくす笑いが広がった。

菜々の頬は真っ赤になるが、とうの本人である秀樹は、いつもの笑顔で受け答えしている。

そして、菜々の元へと訪れると、いつもと変わらない明るい声で問いかけた。

「菜々、急にどした？　お前から誘いに来るなんて、珍しいな」

「あ、あの――。突然、ゴメンね。い、一緒にお昼でもどうかな？……って思って」

表情や声音から、菜々の言わんとする事を、秀樹は瞬時に察したようだ。

いつも浮かべている笑みが一瞬にして消え、真面目な顔へと変わる。

「……分かった。ちょっと待ってて、昼飯取ってくる」

秀樹は踵を返すと、元居た席へと戻っていく。

菜々は小さく、深呼吸をする。心なしか、少し緊張が薄れた気がした。

第六話（後書き）

※改訂前　琴美　？　　改訂後　琴音　○

内容自体に変更はありません（汗）

第七話（前書き）

※しばらく更新できず、申し訳ありませんでしたm（＿）m

お暇なときにでも、お読みいただけると嬉しいです！

第七話

二人がやってきたのは、人目のつかない校舎裏だった。

薄暗く、じめじめとしたここは、人っ子一人いない。

皆、食事をとるなら、もっと明るい食堂や、屋上、中庭などに向かうからであろう。

「ここでいい？　……あんま、話聞かれたくないんだろ？」

「うん。気遣ってくれて、ありがと」

「いや。気にしてない」

彼の瞳は、いつもより真剣だった。

普段は明るい人がこの表情を浮かべると、なかなか怖いものだ、と菜々は思った。

「で、どうしたんだ？　昨日の事で、また何かあった？」

秀樹の問いに、少し口籠（くちごも）る。

彼の幼馴染でもある、という舞花の名を出すのは、少し怖かった。

今更、後にはひけない――そう思いなおし、菜々は口を開く。

「――私、犯人、分かったかもしれない……」

「本当かよ!?　い、一体誰が？」

「菱本さん、じゃないかなって思ってる」

「菱本……って、舞花が!?」

予想以上に驚かれ、菜々はびくりと肩を震わせる。

いつもの彼ならそこで謝るのだろうが、菜々の告白はかなり衝撃的だったらしい。

かなり表情が強張っている。

「――ありえない。まさか、あいつが……」

しばしの沈黙の後、彼が呟いた言葉は“ありえない”だった。

その後も、まるで狂った機械のように、ありえない……と連呼する。

しかし、菜々は確信していた。彼女が犯人である、と――。

確たる証拠が無くても、あの時感じた視線が、菜々に真実を告げていた。

「菜々。お前、多分勘違いしてると思う」

「え？」

気が付くと、彼は同じ言葉を繰り返すのをやめていた。

ただ、悲しげな瞳で菜々を見つめている。

「俺、あいつの幼馴染だから、よく知ってるんだ。……あいつ、舞花さ、そういう曲がった事が大嫌いなんだよ。弱い者苛めとか、嫌がらせとか。昔からそういう事があると、真っ先に止めさせてたんだ。悪いけど、俺には、舞花が犯人だとは思えない」

「……そう、なんだ」

その言葉に、菜々は、ズキン――と胸の奥が痛むのを感じる。

秀樹の口調からは、彼女を大切に思っている、という事がよく伝わってきて……。

不意に菜々は、休み時間の少女達の会話を思い出す。

“マジで！？　舞花と松浦君って、付き合ってたんじゃなかったの？”

周りから見れば、菜々と秀樹なんかより、舞花と秀樹の方がお似合いに見えるのだろう。

小学校からの幼馴染――という言葉が、急に菜々の頭の中を駆け巡る。

「……やっぱり、秀樹君には、菱本さんの方がお似合いなのかな？」

「菜々、何言ってんの？」

「ごめんね、折角呼びだしたのに、嫌な気持ちにさせちゃって」

「いや。別に、そういうわけじゃ……」

そこで、ようやく秀樹はハッとした表情を浮かべる。

菜々に嫌な思いをさせてしまった、というのが、直感で分かったようだ。

「悪い。お前の気持ち考えないで、自分の事ばっか喋っちゃって」

「ううん。私こそ、ゴメン」

口でこそそう言うが、菜々の口調は沈んでいた。

秀樹にもそれが分かるらしい。困ったように眉根を寄せている。

「ご、ごちそうさま。変な事言っちゃって、ゴメンね？」

「え。でも菜々、全然食べてな――」

「ごめんなさい！」

菜々は、まだ半分以上残っている弁当を手早く包み、立ち上がる。

そして、駆け足でその場から立ち去った――。

秀樹君が悪いわけじゃない。……分かってる、そんな事。

これは、ただの我儘（わがまま）で、逃げ出しちゃいけなかった、って、分かってる。

分かっていたのに――どうしても、その場にはいられなかった。

どれくらいの時間が経過したのだろう。

気が付くと、菜々は校舎裏のトイレにいた。

あまり人の訪れないここには、菜々以外誰もいない。

そこで菜々は――声を押し殺して、泣いていた。

人がいないのだから、嗚咽（おえつ）をこらえる必要は全くないのだが、無意識にもし誰か来たら――という恐怖が脳内を支配しているのか、大声で泣く事は出来なかった。

「菜々！」

その時、菜々の耳に聞き慣れた声が飛び込む。

普通なら、わざわざ暗い旧校舎まで足を運ぶ筈がない。

菜々を探しに来た――と頭で理解する前に、菜々は、彼女が今、

もっとも会いたくて、会いたくない者の名を呟いた。

「……秀樹、君？」

「残念でした。悪かったわね、松浦君じゃなくって」

「その声……こと、ちゃん？」

そこには、呆れたような苦笑を浮かべる、親友の姿があった。

琴音は小さく肩を竦め、ポケットからハンカチを取り出し、そっと手渡す。

「なんて顔してんのよ。折角の可愛い顔が、台無しじゃない」

「……んで、ここに？」

「松浦君に言われたのよ。“菜々と喧嘩した。謝りたいから、探すのを手伝ってほしい”ってね。もう、大変だったんだから……。多分松浦君、今も走り回って、あんたの事探してる」

琴音の口調は、厳しかった。

暗に、早く秀樹の元へ戻れ――と言わんとしているのが、菜々にも伝わってくる。

「……今、会いたくない」

「あんた、何言ってるの？　何があったわけ？　朝は、あんなに元気だったくせに」

「……っく――」

「な、菜々？」

嗚咽混じりに、菜々は事の顛末（てんまつ）を話し始めた――。

第八話

「成程、ね。菱本さんが怪しい、って訴えたら受け入れて貰えないで、その麻美って子の悪口を不意に思いだした――ねぇ」

「皆、私と秀樹君なんか似あわない、って思ってるに決まってるんだよ。ことちゃんだってどうせ、心のどこかで、そう思ってるんでしょ？」

「馬鹿ね。そんな事、思ってるわけないでしょ。心配しなくても、二人は充分お似合いだと思うわよ」

「――嘘、つき」

菜々は先程と比べると少し落ち着いてきたものの、未だ情緒不安定だ。

瞳を潤ませ、ぐすっ、と鼻を鳴らしている。

「……じゃ、別れれば？　そんなに松浦君の事が信頼できないなら、別れた方が良いと思う」

「それは嫌！　だって、私――」

「考えてもみなよ！　今回こんな事態を招いたのも、元はといえば、二人が付き合いだしたのが元凶でしょ？　だったら、今まで通りの友達同士に戻れば、万事解決じゃないの？」

「……それは、そうだけど」

確かに、琴音の言う事も一理ある。

それでは犯人の思惑通りではあるが、ここまで精神的に追い詰められているのなら、まだそっちの方がマシ、なのかも知れない。

琴音が、嫌がらせの為だけで“別れた方がいいかもしれない”と言ったわけではない。

菜々の事をきちんと思った上で言っているというのは、彼女にも分かっていた。

……それでも、簡単に納得がいくものではない――。

と、そんな時。

キーンコーンカーンコーン――と、昼休みの終わりを告げるチャイムが、二人の耳に飛び込んだ。

「昼休み、終わっちゃったね。急いで戻らないと、授業に遅刻しちゃうよ。菜々、行こ？」

「……うん」

頭の使いすぎなのだろうか。酷く気分が悪い。

意識の霞んだ頭を振り、菜々は教室への歩を進めた。

気分の不調は、教室へ戻ってもなかなか治らなかった。

それどころか、寧ろ悪化すらしている。

妙に肌寒いのは、気温だけのせいではないだろう。

黒板を見るのも気だるく、菜々は窓の外を、ただぼーっと見やっていた。

「――速水？」

「え、あ――はい」

ふと教師に名を呼ばれ、菜々は慌てて前を向く。

話を聞いていなかった事を咎められるかと思い、身を竦めたが、教師は心配そうな顔を向けていた。

「お前、顔色が悪いぞ。大丈夫か？」

「だ、大丈夫です」

そう言ってみるが、教師の表情は晴れない。

教師は一つ溜息を吐き、前の方に座る少女に呼びかける。

「石田、お前確か保健委員だったよな？　悪いけど、速水の事、保健室まで運んでってくれないか？」

「分かりました」

石田、と呼ばれた少女は、ゆっくりと立ち上がると、菜々の席へとやってくる。

そして、彼女の耳元で小さく囁いた。

「大丈夫？　顔、真っ青じゃん。行こっか」

「――ありがと、石田さん」

あまり親しくない少女だったが、快く菜々に接してくれた。

菜々が弱々しく微笑むと、そっと笑いかえしてくれた。

その優しさに心を温めながら、菜々は立ち上がる。

クラス中の視線が降り注がれていたようだが、あまり気にならなかった――。

「38度、5分……ね。随分高熱じゃない。石田さん、悪いんだけど、担任の先生に早退する旨、伝えてもらえないかしら？　できれば、荷物の用意もしてくれると嬉しいわ」

「分かりました。……速水さん、お大事にね」

最後に小さく手を振った後、保健室から石田が出て行き、室内には、校医の先生と菜々の二人だけが残った。

菜々は、無理矢理校医にベッドに寝かしつけられる。

ベッドに横たわると、少しだけ気分が楽になった気がした。

「速水さん、お家にご両親はいらっしゃる？」

「いえ……うち、共働きなので」

「そう、分かったわ。先生が家まで送っていってあげる。……っと、その前に、病院行かなくちゃね」

「あ、いえ――そこまでしてもらうなんて、悪いです」

「良いから良いから……あ、起きなくていいから。石田さんが来るまで、寝てなさい」

「ありがとう、ございます――」

必要最低限の事を話し終えると、気を遣っているのか、それ以上は何も言わなくなる。

わざわざこちらから話しかける事もなく、菜々は気だるい身体に意識を委ねた――。

過労からくる、ストレス性のもの――と、医師には、そう診断された。

要は、最近起こっている事実に、体が付いていかなくなった、と

いう事だ。

気の弱い菜々には、よくあることだった。

心配そうな顔の校医の好意に甘え、結局菜々は家まで送ってもらった。

一階のリビングにあるソファーに身を委ね、熱で朦朧とする意識の中、菜々は今まであった事を思い返す。

（はじまりは、あの脅迫状だったのよね）

全てが狂い始めたのは、あの日の手紙から。

それからは、数は決して多くないものの、繊細な菜々の心を傷つける出来事が何度もあった。

（考えてみれば、あの後ストーカー犯から受けた被害って、無言電話が二件だけなのよね。こんな事で一々傷ついて、皆に迷惑ばっかかけちゃうし……）

はあ――と、菜々は深い溜息を吐く。

こうして難しく考えてしまうのは悪い癖だ、と自分で分かってはいるのだが、中々直せるものではない。

（……ああ、もう、嫌になっちゃうよ）

そんな菜々の思考の悪循環を止めたのは、今話題の、人気歌手の曲だった。

音の発生源に、菜々はすぐに思い当たる。

……ケータイだ。確か最近、メールの着信音をこの音に変えた記憶がある。

（誰だろ……琴音、かな？）

昼休みの事もあり、正直あまり会いたくなかったが、気づいているくせに返信をしないのは、失礼にあたる。

ぼんやりとする意識の中、菜々はほぼ無意識にケータイを開く。

それが、先程までちょうど考えていた、ストーカー犯からのものだったら――という発想など、思いつきもせずに――。

『新着メールが一件届いています』という無機質な文字が、ディスプレイに浮かんでいる。

発信者は――知らないメールアドレスだった。

『お前と松浦秀樹は釣り合わない。早く別れろ』

たった、それだけの短い文面。

確かに嬉しくはないが、そこまで酷い内容ではないだろう。

しかし、……時期が悪かった。

昨日の菜々なら、そのメールを無視するか、“ふざけるな”メールを送り、自分の持っているアドレスを駆使し、片っぱしからそのアドレスの持ち主探しに勤しんでいたのだろうが、今日の菜々は、いつもより更に心が脆かったのだ。

琴音――そして、秀樹の顔が、頭をよぎる。

親しげに舞花と話す、愛しい、大好きな彼氏の姿……。

(私……もう、二人の顔、見たくないよ)

酷い頭痛とともに襲う、激しい胸の苦しみ。

胸の奥のわだかまりに耐えきれず、菜々は泣いた。

頭に浮かび続けるのは、楽しげに微笑み合う、秀樹と舞花。

菜々には入っていけない空間だった。

(私、こんな気持ちのまま、秀樹君に会えないよ)

秀樹と顔を合わせるのが無性に怖かった……。

その日から菜々は、学校に行っていない――。

第八話（後書き）

はい。ようやく過去編（？）が終わりました。

この後は現在に戻り、あの探偵さんが活躍してくれるはずです！

……多分。

こんなグダグダ駄文ですが（汗）　お暇なときにでも、読んでいただけると嬉しいです♪

第九話

……随分（ずいぶん）と、長い話だった。

否、話の内容だけが長かった訳ではない。

話の途中で菜々が嗚咽を漏らし始め、一旦会話が中断される、という事が、多々あったのだ。

最初の時のように、意味も無く口籠（ごも）る事は少なかったので、苛立ちまではしなかったが、基本的には気の長い啓輔でさえも、実を言うと、少し苦痛に感じる時があったほどだ。

勿論、そんなものは表情にはおくびにも出さなかったのだが。

啓輔は、事務所の壁にかけてある時計を見やる。

現時刻は、午後七時半――彼女が来てから既に数時間経過していた。

窓を見やると、いつの間にか、外は真っ暗だ。

ただでさえ暗くなるのが早い冬。女子高生が一人で帰るには、少し危険な時間帯だ。

啓輔は、腰かけていた長椅子から立ち上がり、玄関近くのフックに掛けているコートを手に取った。

「――送りましょう。家は、どの辺ですか？」

「あ、いえ、大丈夫です！　どうか、お気になさらずに」

突如、菜々は慌てふためく。

彼女は、話を聞いていて感じた、気の弱い少女、という印象通りのようだった。

啓輔は、いつも以上に真剣な瞳を菜々へ向ける。

「速水さん。貴女、ご自分の立場、分かっていらっしゃいますか？　幸いにもまだ、体に影響は無いですが、いつそのストーカー犯に何をされるか、分かりません。只でさえ変質者も多いのですから。……大丈夫です。何も、取って食いやしませんよ」

「でも、私、本当に――」

「……分かりました。ではせめて、タクシーに送らせましょう。少し高くつきますが、ストーカー犯や、変質者に追われるよりはマシでしょう？」

「は、はい。そうします」

タクシー、という手段で、ようやく菜々は納得したようだ。

ぺこりと頭を下げ、事務所の出入り口の扉を開ける。

せめて近場の大通りまでは送って行こう――と、啓輔もその後に続いていった。

啓輔が事務所に戻ると、長椅子に腰かけ、不機嫌そうに頬を膨らます少女が目に映った。

優だ。会話が長く退屈だったのと、無断で外出された事に対して、腹を立てているようだった。

……後者はともかく、前者の場合は、彼女にも責任があるような気はするが。

優は、表情に合った不機嫌そうな声を出す。

「随分遅かったね。菜々さんの話が長かったのは知ってるけど、まさか最後に口説きにかかるとは思わなかったよ」

「……は？」

「だって、いい年したおじさんが、か弱い女子高生を二人きりで車に誘った上、“何も、取って食いやしませんよ”なんて気持ち悪い台詞言うなんて、明らかにナンパ――った！　い、痛い！　止めて！」

「どこをどう捉えたらそういう解釈になるんだ！　この馬鹿！」

啓輔は、両手で拳骨を作り、優のこめかみにぐりぐりと押し当てる。

俗に言う梅干という奴だ。かなり痛いらしく、優の瞳には薄らと涙が滲んでいる。

啓輔はしばらくそれを続けていたが、優の口から“ごめんなさい”という言葉が出てくると、ようやくその手を止めた。

優は小さく頭をさすりながら、きっ、と啓輔を睨みつける。

「……パパ、ちょっとは加減してよね。これ児童虐待(ぎゃくたい)だよ？　訴(うった)えられちゃうよ？」

「この程度で訴えられるなら、全国の親達は今頃全員刑務所だろ」

啓輔は呆れた顔で娘を窘(たしな)める。

優は未だ膨れていたが、ふと思いなおしたように、啓輔に問いかける。

「で、パパ。明日からどうするの？　大方、犯人の目星は付いてるんでしょ？」

「お前……さては、聞いてたな。まあ、大体はな」

その言葉に、優はすっと目を細める。彼女曰く、思考が推理モードに切り替わった、という事らしい。

尤も、どうせ何か言う時は、ワトソン博士もびっくりの迷推理なので、啓輔が真面目に聞いた試しは無いのだが。

「で、これからどうするの？　まさか、今から高校まで直行……なんて、言いださないよね？」

「今何時だと思ってるんだ。これから急いで行ったとしても、着くのは八時半頃――とっくに皆、帰ってるだろ」

菜々曰く、陸上部の活動が終わるのは、いつも大体六時頃だそうだ。

事務所から彼女達の通う学校までは、多く見積もって約一時間。

とすると、帰りは大体七時半過ぎ……関係者からの話が長引いたり、渋滞などがあったら、もっと遅くなるだろう。

啓輔は、帰りが適度に遅くなる時間の場合は、夕飯や防犯などの関係上、出来るだけ優を同行させる事に決めていた。

まあ、ただ単においてけぼりにされて拗ねる娘をあやすのが面倒――という理由もあるのだが。

「優。明日は、帰るの少し遅くなりそうなんだけど――」

「勿論一緒に行くよ！」

「……俺、まだ全部言い終わってないんだけど」

「助手兼次期沢内探偵なんだから、事件に同行する権利くらいあるでしょ？」

「次期沢内探偵、ねぇ」

偉そうに腰に手を当てる少女は、とても探偵には見えない。

優も、あと数十年もすれば、立派な探偵になっているのか――と、啓輔は思い耽るが、すぐに首を振る。

「無理だ。俺には想像できない」

「パパ、今何かすごく失礼な事考えてなかった？」

「……さて、夕飯の支度でもするか」

「あ、ちょっと！　話を変えないでよ！」

啓輔はさっと目を逸らし、座っていた応接用のソファーから腰を上げた。

冷たい優の視線を受けながし、啓輔は、キッチンのある奥の部屋へと向かって行く。

――さて、今日のメニューは何にしようか。

こうして、夜は更けていく――。

第十話

翌日、午後四時半過ぎ。優が帰ってくると、啓輔は、菜々の通う青港高校へと車を走らせた。

啓輔はハンドルを操作しながら、これから行う事を整理する。

まずは、関係者――松浦秀樹と、塚本琴音、そして菱本舞花に対する聞き込みだ。

いきなり車内に誘い込むのも何なので、近くの小洒落た喫茶店にでも入って事情を聞くのが良いだろう。

……塚本琴美と松浦秀樹の二人はともかく、菜々と敵対関係にある菱本舞花が真面目に話を聞いてくれるかどうかは微妙だが。

そんな父親の心情を察したのか、助手席に座る優が、啓輔ににこっと微笑みかける。

「大丈夫だよ。いざという時は、この優様に任せなさい！　この得意な話術で――」

「あーはいはい。そりゃどーも」

「もう！　ちゃんと聞いてよね！」

「はいはい」

啓輔は小さく頬を膨らませる優の頭を、左手でぽんぽんと撫でる。

子供扱いするな～やら、片手運転は危ない、なんて声が聞こえてきたが、華麗（かれい）にスルーする。

その内、啓輔に真面目に取り合う気が無い事を察し、優は何も言わなくなる。

小さく苦笑を浮かべ、啓輔はようやく左手を離した。

「あ……ねぇ、パパ。あれじゃない？　菜々さんの通う学校」

「ん？　……ああ。そうみたいだな」

優が遠くに見える、大きな白い建物を指差す。

カーナビを確認すると、確かにそこには、“都立青港高等学校”と刻まれている。

どうやら、目的地は近いようだ。

啓輔は、カーナビを見つめたまま、近くに車が停められそうな場所は無いか――と思案する。

流石に、校内に停めるのはまずいだろう。

高校付近にコンビニの表示を見つけたので、そこに駐車する事にする。

距離から推定して、高校から歩いて五分――まあ、丁度良い距離だろう。

まもなく、啓輔はコンビニを見つけた。

青港高校までの道中、買ったばかりの菓子パンを頬張りながら、優が問いかける。

「ねえ、パパ。いざ高校へ行くのは良いんだけどさ。……いきなり関係者でもないおじさんが潜入して、大丈夫なの？　大ごとになって、教師とか呼ばれたら面倒だよ」

「おじ……まあ、確かにな」

「どうするの？　まさかとは思うけど、無計画とか？」

「――」

啓輔の沈黙を、是（ぜ）と受け取ったようだ。

優が困ったように眉根を寄せる。

「ただでさえ子供連れのおじさんなんて怪しさ満載なのに、その上“ねえ君、よかったら僕の車に来ない？”……なんて、犯罪者だよ？　もしそんなおじさんがいたら、優だったら警察呼ぶよ。いやマジで」

「流石に、そんな誘（さそ）い方をする気はないんだが。まあ、ある程度は考えてあるから安心しろ」

「……ふーん」

「あ、あれっぽいぞ。青港高校」

冷たい娘の視線をかわし、啓輔は白い校舎を指差す。

車で遠目から見たものより、少し古く見える。

啓輔の記憶が正しければ、確か彼の学生時代には既に名門と言われていた筈だ。

単純計算で、創立十年以上。

学校としては比較的新しい方なのだろうが、校舎が古くなってきているのにも頷ける。

腕時計を確認すると、五時四十分を指している。

辺りは既に暗くなりかけているが、校舎から漏れる光のお陰で、足元は明るい。

二人は、校門の前で生徒達が出てくるのを待つ事にする。

しばらくそうしていると、やがて、校舎から一人の女子生徒が現れた――。

「ねえ、君。ちょっと時間良いかな?」

「……はあ。貴方、一体――」

少女は、啓輔に訝しげな瞳を向ける。かなり怪しまれているようだ。

勿論それは当然の反応なのだろうが……少し傷つく。

「二年の、松浦秀樹って知ってる？　俺の弟なんだけどさ。今日、急用ができたから、迎えに来たんだ。まだ、校内にいる？」

「秀樹に、お兄さんなんていない筈ですけど」

「長い間海外にいてね。久しぶりに戻って来たんだ。知らないのも無理はないよ」

“秀樹”という呼び名から察するに、どうやら彼とは顔見知りのようだ。

家族構成も知っているようなので、ある程度親しい仲なのかもしれない。

まだ怪しんではいるようだが、その説明で一応納得したらしい。

少女は校舎を指差した。

「秀樹なら、もうすぐ来ると思いますよ。部活も終わったし、今は着替え中だと思います……あ、ほら」

その時、校舎から少年達の集団が見える。

重そうな鞄を背負い、和気あいあいと話しているのが見て取れた。

「秀樹。あんたにお客さんが来てるわよ。お兄さん、だって」

「お兄さん？　俺、一人っ子なんだけど――」

少女が集団に声を掛けると、リーダーらしき一人の少年が振り向く。

成程。確かに、菜々の話通り、なかなか整った顔つきをしていた。

しかし、彼女のいう爽やかな笑顔は浮かべておらず、疲れたように弱々しく微笑んでいた。

心なしか、少しやつれている。

やはり、菜々が来ていない事に影響されているのだ――と、啓輔は思った。

「こんにちは。……えっと、秀樹ですけど」

「ああ、突然ごめんね。速水菜々さんについて、話があるんだけど。時間、良いかな？」

後半部は、周りに聞こえないように、少し声を顰める。

思った通り、“速水菜々”という単語に、秀樹はピクリと反応した。

「……ちょっと、待ってて下さい」

先程とは違う、恐ろしい程冷静な声音で、秀樹は啓輔に囁き返す。

一緒に校門を出てきた少年達に適当に言い訳をした後、彼は戻ってくる。

「お待たせしました。話って、一体？」

「ここじゃあ何だから。近くのファミレスにでも」

「……分かりました」

秀樹は、しっかりと頷いた。

第十一話

三人が向かったのは、某ファミリーレストランのチェーン店だった。

時間が時間だけに、客は少ない。

ちらほらと学生達の姿も見受けられたが、幸いな事に、秀樹の友人らしき人物はいないようだ。

啓輔は出来るだけ奥の方の席を選び、腰かける。

着席とほぼ同時にやってきた店員に軽食とソフトドリンクを三つ頼み終えると、啓輔は口を開いた。

「まずは、自己紹介から始めましょうか。私、沢内探偵事務所所長、沢内啓輔と申します。本日は、依頼人である、速水菜々さんの件について、幾つかお尋ねしたい事がありますので、このような場を設けさせて頂きました。隣に座っているのが、娘の優です。秘密は厳守致しますが、席を外させたい時は言って下さい」

「ご丁寧に、どうも……。俺、菜々の彼氏の、松浦秀樹です」

啓輔の正体は、思いもよらないものだったらしい。秀樹は呆然とした面持ちで彼を見つめている。

緊張をほぐすため、啓輔は小さく微笑を浮かべた。

「そんなに、固くならなくても結構ですよ。ただ、私の質問に幾つ

か答えて下されば、結構です。勿論、答えにくい質問には、無理に答えて下さらなくても構いません」

「分かりました。俺なんかの証言で、菜々が少しでも救われるなら……」

「ご協力、感謝します」

「あ。でも、その前に一つ、俺から質問しても良いですか？　どうしても、確認したい事があるんです」

「何でしょう？」

「――ここ一週間の間に、菜々と会われたんですよね？　あいつ…元気にしてましたか？」

啓輔の意と反し、それは素朴な疑問だった。

しかし、秀樹の浮かべる表情はどこか切実だ。

こんな胡散臭い者の言葉でも、そこに彼女が戻ってくる可能性があるのなら、迷わず信じる、という事だろう。

菜々は、間違いなく想われていた。

「どうでしたか？　俺、何度かあいつの家行ってみたんですけど、居留守使われて。あいつと最後に会ったのは、もう一週間くらい前なんです」

「――勿論、元気でしたよ」

その瞬間啓輔は、隣で優がはっと息を呑んだのを感じた。

事務所に来た時の菜々は、情緒不安定で、お世辞にも元気と言える状態では無かった。

しかし、真実とは時に残酷な物となる。それを知る彼は、敢えて嘘をついた。

啓輔の答えに、秀樹がほっと息をつくのが分かった。

心なしか、先程よりも落ち着いている。

「有難うございました。俺に答えられる範囲の事なら、何でも聞いて下さい」

「……では、質問に移させて頂きます」

啓輔は、この少年に聞いておきたい事が二つほどあった。

「まず、一つ目に。……松浦さん。貴方は、菱本舞花さんに疑いをかけた菜々さんと口論になり、喧嘩をしたんですよね？」

秀樹がはっと顔を強張らせたのが分かった。

幾ら何でも、いきなりすぎただろうか……？　と少し反省する。

しかし、彼は少し間を置いた後、小さく頷いた。

「今思えば、あいつ――菜々には、酷い事をしたな、って思ってま

す。……自惚れかもしれないけど、信頼を寄せてくれていた菜々からしてみれば、結構辛かったと思います。それに気付いて、慌てて謝ろうと思って、あいつの姿探したんですけど――何処にも、いなくて……」

それっきり、彼は口をつぐむ。その当時、菜々がいたのは旧校舎の女子トイレだ。

男子の彼が探しあてられなかったのも、無理はない。

「貴方は、幼馴染の無実を訴えた。ただ、それだけの事をしたまでです。貴方に責任はありません」

「……ありがとうございます。そう言って貰えると、少し気分が晴れます」

秀樹は、弱々しく微笑んだ。

やはり、“気にするな”と言われても、そう簡単に受け入れられるものではないらしい。

これは当人達の問題であり、部外者が口出しする事ではない。

啓輔はそれ以上その事には触れず、話を進めた。

「では松浦さん――貴方は、何故そこまで、彼女を信じているのですか？」

「彼女、って、舞花の事ですよね？　俺、あいつの幼馴染なんですよ。あいつの事は、小学校の時から知ってるんです」

「ええ。その辺りは、速水さんから伺っています」

「そうですか。……いや、実はこの話には続きがあって――恥ずかしながら、俺、小学生低学年の頃、一時期苛められてたんですよ」

「……ほお」

その情報は初耳だった。照れくさそうに頭を掻きながら、秀樹は話を続ける。

「俺、昔は結構弱っちくて、その事をからかわれて、ちょっかい出されてたんですよね。そんな俺を助けてくれたのが、舞花でした――」

“止めなさいよ、あんた達！　そんな事してて、恥ずかしくないわけ！？”

“秀樹君も秀樹君よ！　男の子でしょ？　なんで言い返さないの！？”

「――後で知ったんですけど、あいつんち、一人兄貴がいるらしくて。結構やんちゃに育ってきたらしいんです。あんまり仲良くなかった俺の事も、何の見返りも持たずに、助けてくれて……だから、

そんなあいつが、ストーカーなんて卑怯な真似……絶対にするわけないんです」

そう告げる彼の瞳は真剣そのもので……とても、嘘をついているようには見えなかった。

第十二話

確かに、秀樹の話を聞く限り、菱本舞花が犯人だ――と安直に決めるのは、早すぎる気がする。

……まあ、かといって、彼の話をまるっきり鵜呑(うの)みにし、彼女を容疑者候補から外す気はさらさらないのだが。

啓輔は二つ目の質問を、秀樹に問う。

「それでは最後にもう一つ――まあこれは、純粋な好奇心が強いのですがね。お二人は、どこで知り合われたんですか？　速水さんの話を聞く限り、お二人のクラスは違うらしいですし……失礼ですが、普段の速水さんと松浦さんに、接点があるとは思いにくい」

結構酷(ひど)い事を言った気もしたが、秀樹は気にした様子もなく、照れくさそうに微笑んでいた。

「ああ。……これ、ちょっと惚気(のろけ)話になっちゃうんですけど、良いですか？」

「どうぞ」

「菜々とは、一年の頃、クラスが同じになったんです。出席番号の関係で、席替えする前の最初の一ヶ月は隣同士で……」

そこで一旦言葉を区切り、秀樹は、どこか遠くを見る様な目をした。

口元には薄らと微笑が滲んでいる。

その頃に一目惚れしたんだな――と、啓輔には何となく思った。

「――ああ、すみません。つい、当時の事を思い出しちゃって。それで、二年になってクラスは離れちゃったんですけど、文化祭の実行委員会で、一緒になったんです」

「成程。それで、昔の想いが蘇ってきた、と。……随分、素敵なお話ですね」

「す、すみません！　こんなくだらない事長々と話しちゃって……」

啓輔がにこやかに微笑んだ瞬間、はっとしたように、秀樹が真っ赤になる。

菜々の聞いていたイメージとの違いに少し戸惑ったが、なかなか面白い少年だ――と啓輔は思った。

「いえ、聞いたのはこちらですし。こちらこそ、お時間を取らせてしまい、すみませんでした」

「い、いえ、そんな――」

秀樹は照れ隠しに、頼んだアイスコーヒーに口を付けた。

しばらく二人は世間話を交わしていたが、六時半を過ぎた頃、啓輔はわざとらしく時計を見やる。

そして、秀樹に小さく会釈をしながら、申し訳なさそうに告げた。

「こんな時間まですみませんでした。そろそろ、失礼します」

「あ、じゃあ俺も……」

啓輔が立ち上がると同時に、秀樹も立ち上がった。

「え？　パパ、もう行くの？」

届いたばかりのサンドイッチを頬張る優が不満げな声を上げたが、啓輔は無視する。

優は名残惜しげに皿を見つめていたが、二人に置いて行かれるのは嫌なので、渋々立ち上がった。

「お会計、１１５２円になります」

「えっと、アイスコーヒー一杯だから――」

レジの前で財布を取り出す秀樹を、啓輔がにこやかな微笑みで制した。

「ああ、結構です。今日は、私の奢りですよ」

「そんな……悪いです」

「話を聞かせて下さったお礼です。気にされなくて結構ですよ」

「本当に大丈夫ですから。俺、お金の事で問題作るの嫌いなんです」

困ったように微笑みを浮かべ、秀樹は自分の分を店員へ支払う。

幾ら高校生とはいえ、所詮は学生。

手に職を持つ啓輔と比べ、手持ちがそんなに多いわけではないだろう。

最近の若者にしては、随分しっかりしているな――と啓輔は思った。

……いや、彼自身も充分若者の部類に入るのだが。

結局、秀樹が啓輔に奢られる事は無かった。

二人が秀樹と別れ、車に戻っても、優の機嫌が悪くなる事は無かった。

食事の邪魔をされたのだから、てっきりまたあの不機嫌そうな顔で膨れ出すかと思っていたので、啓輔には少し意外だった。

「優、怒ってないのか？　サンドイッチ、まだ全部食べてなかったのに」

「え？　……ああ、別に」

シートベルトをしながら、優は淀(よど)みなく答える。

確かに、声音からも怒りは伝わってこない。

一体どういう心境の変化だ？――と、啓輔は、訝(いぶか)しげに眉根を寄せた。

「どうしてまた急に？　てっきりお前の事だから、“パパの馬鹿！　サンドイッチの神様に呪われちゃうよ！”なんて言い出しかねないと思って、結構覚悟してたのに」

「……パパ、一体私の事、何だと思ってるの？」

その言葉に、優は少し不機嫌気味に眉根を寄せる。

“食い物の恨みが尋常(じんじょう)じゃない魔人”という言葉が喉の奥まで出かかったが、何とかこらえた。

「パパがあの時間に帰った理由は分かってるもん。秀樹さんの帰りがあまりにも遅くなるのを防いだだけでしょ？　秀樹さん、何度かちらちら壁の時計見てたし」

確かに、優の言うとおりだ。

世間話をしている間にも、彼はちらちらと不自然に時計のある方を見やっていた。

気遣いの出来る彼の事だ。

これも菜々のため――と、なかなか別れを切り出せなかったのだろう。……悪い事をした。

啓輔は小さく苦笑を浮かべた。

「当たり。……よく分かったな？」

「私だって、いつまでも子供じゃないんだよ？　人間観察くらい、どうって事ないもん！」

そこで優はえっへんと胸を張る。

いつもと変わらないその動作に啓輔はクスッと微笑んだ。

途端、優が頬を膨らませる。

「な、何よ！　また馬鹿にしてるの？」

「してないって。――いや、やっぱり変わってないな、って思っただけだよ」

「やっぱり馬鹿にしてる！」

少しは成長したかと思ったが、やっぱりまだまだ子供だな――なんて親心は、優には伝わらなかったようだ。

啓輔が車を発進させても、優の頬はまだ膨らんだままだった。

第十三話

翌日、午後六時過ぎ。二人は再び青港高校の校門前にいた。

何故また同じ場所に足を運んでいるか――？　答えは簡単だ。

昨日話を聞きそびれた、菱本舞花を呼びだす為だった。

しばらくそうしていると、やがて校門から見覚えのある少年――秀樹が顔を出す。

今日は一人のようだ。周りに昨日一緒にいた友人達はいない。

彼はぼーっと歩いていたが、啓輔の存在に気が付くと、少し驚いた様な顔をしながら、近付いて来た。

「沢内探偵？　今日も何か？」

「ああ。今日は、菱本さんに話を聞こうと思ってね。……彼女は、まだ学校に？」

「はい。マネの仕事があるみたいで……。少し、遅くなるそうです」

“菱本”の名を出した割に、彼はあまり動揺（どうよう）していない。

小さく微笑みながら、校舎の方を指差した。

「といっても、あと少しすれば来ると思いますよ。そんなに長引く仕事じゃない、って言ってたんで――あ、ほら、来ました」

秀樹の言葉に校門を見やると、確かにそこからは一人の少女が歩いてきていた。

彼が手招きすると、怪訝そうな表情でこちらに向かってくる。

「舞花、お前に話しがあるんだって」

「話？　……って、貴方。昨日の人じゃない」

「昨日？　……ああ。貴方が菱本さんだったんですか」

少女――菱本舞花は、昨日校門前で秀樹を呼んだ張本人だった。

「成程。探偵さん――ね」

納得したような言葉とは裏腹に、舞花の表情は訝しげだ。

非協力的なその態度に、啓輔は苦笑いを浮かべた。

彼等のいる場所は、昨日も訪れたファミレス。現在席に腰かけているのは、啓輔、舞花、優の三人だ。

舞花は秀樹に来てほしかったようだが、彼がいると答えにくいであろう質問を控えていたので、啓輔の方から同席を断った。

その事も関係しているのか、舞花は先程から不機嫌そうだった。

「すみません。秀樹さんがいると、答えにくいと思う事が幾つかあったので――彼には席を外してもらいました」

「……何ですか、それ。私に、そんな変な事を聞くつもりなんですか？　人様に聞かせられられないような話をする気はありません」

舞花は、良く言えば真っすぐ――悪く言えば、頑固（がんこ）だった。

己を貫き通す意思は立派だと思うが、今の啓輔にとっては苛立（いら）ちの対象にしかならない。

必死に口角を上げながら、啓輔は問うた。

「では、本題に入ります。菱本さん、速水菜々さんをご存知ですか？」

「知ってるわ。秀樹の彼女でしょ？　で？　私と彼女に、一体何の関係が？」

「単刀直入に聞きますが――菱本さん。貴方、松浦さんに好意を抱いているんじゃありませんか？」

「……それは、私が彼に惚（ほ）れている――と、そういう解釈（かいしゃく）でよろしいのでしょうか？」

「そう考えて下さって構いません」

「――」

啓輔がそう告げると、舞花は俯き、黙り込んでしまう。

よく見ると、彼女は肩を震わせていた。

……もしや、自分の心無い言葉で泣かせてしまった――？

つい苛立っていたからといって、彼女の心の傷を抉ってしまったのではないか――と、啓輔は後悔する。

啓輔は珍しく、慌てた声を上げた。

「すみません……こんな、くだらない事聞いてしまって。……あの、今の質問の事は、忘れて――」

「……っく、くすくす……」

「え？」

啓輔の言葉に、舞花は堪え切れなくなったかのようにくぐもった声を出す。

「あっはっはっはっは――！」

彼女は、笑っていた。

「成程、そういう魂胆ってワケ。速水さんの不登校は私のせい――私が、彼女に“秀樹と別れなさい！”とでも告げた。だから私は、脅迫罪で停学処分。……ううん、退学処分、かしら？　そして、秀樹と速水さんの二人は、二人仲良く過ごしました。めでたしめでたし――そんなシナリオ？」

そこで舞花はふっと真顔になる。

盛大に笑った後なので、それは、少し恐怖すら感じさせた。

「――ふざけないでよ。何の根拠があってそんな事を言えるわけ？　私を悪者にして、全ては万事解決？　馬鹿馬鹿しい。本当にそんな迷推理言いだしたら、私、一生あんたの事怨み続けるわよ」

「……それを推理して、真相を探るのが私の仕事ですから」

「それは随分、“迷探偵”さんの台詞にふさわしいですわね」

舞花は“迷探偵”の部分を強調する。

彼女のその一言で、場の空気は一気に重たくなった――。

第十四話

舞花の発した一言で、一同はシン――と静まり返る。

最初の方は不敵に微笑んでいた彼女も、あまりにも長い間啓輔が黙っているので、気まずそうに視線を反らした。

少し言いすぎたかしら――と言いたげに、舞花は啓輔を見やるが、彼は何も言わない。

結局舞花は話しかけるタイミングを掴めず、黙り込んでしまうのだった。

と、その時――。

「ねえ、お姉さん。それ、見せて？」

「……え？」

突如、舞花の耳に、幼い少女の声が飛び込む。

それまで、啓輔の横で大人しくジュースを飲んでいた少女――優だった。

彼女は不思議そうな瞳で、舞花の鞄に付けられている羽の付いたキーホルダーを見つめていた。

そして、悪意を感じさせない純真無垢な瞳で微笑みかける。

「このキーホルダー、どこで買ったの？　すっごく可愛いね」

「ああ、それ？　ドリームキャッチャーっていうの。アメリカのキーホルダー……っていうよりは、お守りみたいな物かしら？　悪い夢を、網でからみとってくれるんですって」

「へー。お姉さん、アメリカなんて行ったんだ。いいなー」

優はそう言いながら、にこやかに笑う。

彼女の底抜けない明るさに、舞花の心も癒されたらしい。

気が付けば、二人はにこやかに微笑みあっていた。

「優、行った事ないからよく分からないんだよね……。家族旅行？」

「まあ、そんな所ね。両親があっちに住んでるから。お休みの時、偶に遊びに行くのよ」

「お休み……って、この前の三連休？」

「ん。そうよ」

“三連休”というのは、今から三週間前の事。

金曜日に祝日が被った為、本来なら土・日の二連休が、金・土・日の三連休となっていたのだ。

「じゃあ、帰ってきたのは日曜日？　随分急な旅だったんだね」

「まあね。……といっても、時差ボケとかの影響で、実際に学校に行き始めたのは、その翌々日の火曜日からなんだけど」

「ふーん……」

優がそこまで言うと、啓輔がはっと何かに気付いた様な顔をする。

小さく口角を上げた父を見やり、優はそっと目を細めた――。

翌日。少女は、休日だというのに学校に来ていた。

別段、部活動や委員会があるわけではない。

昨夜“速水菜々の件について話がある”と、探偵を名乗る男から電話があったのだ。

少女にとって、“速水菜々”は決して赤の他人ではない。

一体何の話なのだろう――と思いながら、学校までの道を歩いていた。

やがて少女は、学校の正門前に着く。

そこには二つの人影があった。

一人は、電話をした男であろう若い青年。

もう一人は、その男の娘らしき幼い少女だった。

男は、少女を見やると、小さく手を挙げる。

そして、つかつかと少女の元へ歩み寄っていった。

「こんにちは。……いや、“初めまして”の方が正しいのかな？塚本琴音さん、ですね？」

「はい、初めまして。……確か、沢内探偵、でしたよね？」

少女――琴音は、小さく微笑んだ。

第十四話（後書き）

次回解決（？）編なので、今回は結構短めです（汗）

出来しだいうp予定なので、読んで頂けると幸いです！

第十五話

数分後。三人は学校近くの公園に居た。

ここでは何だから――と、啓輔が誘ったのだ。

場所を選ぶような話なのだろうと察した琴音は、その提案を快く受け入れた。

琴音を真ん中にして、三人がベンチに腰掛けると、啓輔が口を開いた。

「まず塚本さん。貴方に、一つ確認しておきたい事があります。……速水さんが、ストーカー事件に巻き込まれている事はご存知ですよね？」

「はい。……そのせいで菜々、最近学校来てなくて……」

親友である少女の名を出され、琴音は小さく俯く。

大切な友人が学校に来ていない――というのは、中々辛いものだ。

「――あの子、昔からこういう事に弱くて……色々考えすぎちゃう分、心のダメージが大きいんだと思います」

「昔？　彼女とは、幼馴染か何かなんですか？」

「中学の時の同級生なんです。同じクラスになって意気投合して……。菜々とは、よく気が合うんです」

「成程。気が合う――ですか」

「……それが、何か？」

“気が合う”という部分に、啓輔はやけに過剰（かじょう）に反応する。

言葉自体に、特におかしな部分は無い筈だ。琴音は、彼の反応に首を傾げる。

「いえ。……“気が合う”ならやはり、好きな人の好みも似ているんでしょうね」

「……私を、疑っているんですか？」

啓輔の言葉で琴音は、彼が何を言わんとしているのか察したようだ。

不快気に眉根を寄せる。

彼はその質問には答えず、言葉を続けた。

「最初、速水さんの話を聞いた時、幾つか不思議に思った事があったんです」

「聞かせて下さい」

「――いえね。そんなにおかしいというほどの事でも無いのですが。菜々さんが脅迫状を貰った翌々日……塚本さん。あなた、朝彼女を迎えに行ったらしいのですが、覚えてますか？」

「はい。確かに、そんな事もありましたね」

「……何故、その日の前日――つまり、脅迫状が届いた翌日に、彼女の家に迎えに行かなかったのですか？」

「そんなの……個人の自由じゃないですか。あの日は、偶々（たまたま）寝坊しちゃって……菜々と一緒に行くような余裕、無かったんです」

「――まあ、良いでしょう。それくらいの可能性なら、充分考えられますしね」

勿体ぶった割には、意外に啓輔はあっさりと引き下がる。

しかし、彼の表情はまだ余裕がある。

これ以外にも、琴音を犯人扱いする理由があるらしい。

「それからもう一つ。その日の昼。松浦さんと速水さんが口論になった時の事です。勿論、覚えていますよね？」

「ええ」

「あの時、速水さんに“別れれば？”なんて、告げてましたよね？私には、どうしてもそれが貴方の本心にしか思えないんですよ。速水さんは、自分の事を考えて言ってくれた、と解釈（かいしゃく）したようですけど」

「解釈も何も、私、別に本気で言ったわけじゃ――」

「あの場合、貴方が本気でそう思っていたなら、“二人はお似合いなんだから、もっとしゃきっとしなさい”とでも、言いそうなんですけどね？」

「……それは――」

確かに琴音の性格なら、自分の意見を言った後きちんとフォローするだろう。

“別れた方が良い”なんて後ろ向きな意見は、彼女らしくない。

「それに、貴方が犯人なら、様々な疑問が解決します。例えば、無言電話にしても、友人である貴方なら、電話番号を知っているのも頷けます。非通知設定なんて、今の時代、簡単に出来ますしね」

「そ、そんなの、ただ単に帳尻を合わせているだけじゃない！　別に、私じゃなくても誰にだって出来るわよ！　あの“別れろメール”の件だって、今時アドレスくらいすぐに手に入るでしょ！？」

「……別れろメール、ですか」

そこで、啓輔はすっと静かな声音になる。

琴音は彼の態度を不審に思い、何か失言をしてしまったのか！？と、焦（あせ）る。

今までの発言におかしな所など無かった筈だ。……一体、何故彼は急に――？

彼女の疑問は、啓輔の一言によってすぐに解決する事となる。

「塚本さん――何故、その事をご存じなのですか？」

「え？　……あ」

「彼女はそれ以来学校に来てはいない筈なのですが……一体、どこでその情報を？」

「そ、それは……そ、そうよ！　あの日、菜々からメールが来て……。それで、知ったんです」

「……ほう。成程」

琴音は、明らかに動揺していた。

これでは、自分で“私が犯人です”と言っているようなものだ。

もう一息で、彼女は全てを認めるだろう――と、啓輔は判断した。

「そ、そうよ……犯人はあの女――菱本さんよ。そうに決まってるわ！」

「……その、根拠は？」

「根拠なんてあるわけないでしょ？　状況的証拠だけで充分よ！　あの子がやったに決まってるわ！」

かなり錯乱しているようだ。

うわごとのようにぶつぶつと“そうよ……彼女が犯人に決まっている”などと繰り返している。

これこそが啓輔の最大の狙いだった。

「――彼女に犯行は不可能ですよ。脅迫状が届く前々日まで、彼女はアメリカにいたんですから」

「な、何よ。前々日でしょ？　帰って来た翌日は休むとしても、充分脅迫状は書けるし、下駄箱にいれておく事だって――」

「無理ですね。そもそも、脅迫状なんてものを書きようがない」

「……それ、どういう意味ですか？」

「お忘れですか？　……二人が付き合いを始めたのは、脅迫状の届く前日――つまり、脅迫状を書くためには、二人が付き合い始めた、その日にその事を知っていなくてはいけないんですよ」

「あ……」

そこまで言われ、ようやく彼女は取り返しのつかない失言をしてしまった事に気が付く。

しばらく目を見開いた後、小さく項垂れた。

「――最初のきっかけは、ほんの些細な事だったんです」

琴音はそう言うと瞳を伏せ――一年前の春に、想いを馳せた。

第十五話（後書き）

次回、犯人の独白（？）編突入ですw

きっともうすぐ完結のはず……です。多分。

長くても2～3話で終われればいいな……と思っております^―^；

ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました☆

最後までお付き合いいただけると嬉しいです♪

追記

すみません^―^；　あと2～3話じゃ終わりそうもないです（汗）

全く話が進まないのですが（汗）

のんびりと最後までお付き合い頂けると嬉しいです☆

第十六話

一年前、春。

“ねえ、知ってる？　三組の松浦秀樹君”

“知ってる知ってる～！　まだ入ったばかりなのに、もうレギュラー入りしたんでしょ？”

“イケメンで運動神経抜群。おまけに頭も性格もいいなんて、まるで王子様だよね～”

琴美が、彼“松浦秀樹”の噂を聞いたのは、入学してすぐの休み時間。

大して仲良くもない女子グループの女子達の話だったので、詳しくは覚えていないが、一目見てみたいな――なんて野次馬根性を持ったのはよく覚えている。

その日の昼休み。琴音は一年三組を訪れた。

別段、噂の彼を見に行ったわけではない。

ただ単に、親友をお弁当に誘いにいっただけだ。

彼女――速水菜々もまた、一年三組に所属する者の一人なのだ。

琴音は周りを見回し、親友の姿を探す。

菜々は――いた。隣の席に座る少年と、楽しげに談笑している。

少年の姿は、窓から差し込む光の関係で、シルエットしか見えない。

果たして声を掛けていいものなのか――と軽く悩むが、彼女が声を掛ける前に、菜々が琴音に気が付いた。

「あ、ことちゃん！　迎えに来てくれたの？」

「まあね。お昼行こ？」

「うん、ちょっと待ってて。……ゴメンね、松浦君。この話の続きは、また後で」

「ああ。後でな」

“松浦君”と呼ばれた少年は、小さく手を上げ、菜々の言葉に応える。

その時ふと、先程の少女達の会話が頭を過った。

“ねえ、知ってる？　三組の松浦秀樹君”

ちょっとした好奇心で、琴音は問いかけてみる。

「ねえ菜々。もしかして彼って……松浦、秀樹君？」

「……君、何で俺の名前知ってんの？」

琴音の言葉に、“松浦君”は瞬時に反応する。どうやら、当たりのようだ。

菜々も、不思議そうな顔で琴音を見つめていた。

「さっき、うちのクラスで話題になってたの。イケメンで運動神経抜群。おまけに頭も性格もいいなんて、まるで王子様みたいだって」

「王子様なんて……そんな、大層なもんじゃないよ」

少年は困ったように小首を傾げる。

その時、カーテンが閉じられ――彼の顔が、見えた。

苦笑を浮かべる彼の顔立ちはかなり整っている。

琴音はあまりジャニーズなどには詳しくないのだが、そういったグループの一人だと紹介を受けても、全く驚かない。

体つきは華奢だが、決してガリガリという訳ではない。

必要最低限の筋肉が程良くつき、健康的なスポーツマン、という感じだ。

これで本当に頭も性格も良いというのなら、確かに、まるで何処かの国の王子様のようだ。

爽やかな笑みを浮かべる彼に、いつしか彼女の目は釘付けになっており……動悸が高まるのを感じる。

ああ……これが、一目惚れなんだ――と、琴音は思った。

その時、彼女は気付かなかった。

彼が自分ではなく、親友に熱い視線を注いでいた事に。

この日をキッカケに、全ての歯車は、少しずつ狂いだしていく――。

「ことちゃん。私、松浦君の事……好きかもしれない」

頬を赤く染めた彼女からそう告げられたのは、それから約一カ月ほど経った後の昼休みの事だった。

「――そう、なんだ」

しばしの沈黙の後、琴音が口にしたのは、酷く乾いた言葉だった。

口角を上げるのが辛い。

幸いな事に、困ったような愛想笑いの意味は菜々に気付かれてい

ないようだった。

不自然な親友の態度に気付かないまま、菜々は話を続けていく。

「最初の頃は、ただ格好良いだけで、付き合いにくい人なのかな～……なんて思ってたんだけどね、お話ししていくうちに、本当は良い人なんだ、って気付いていって……」

そこまで話終えると、菜々は照れたように瞳を伏せる。

菜々の事は中学の頃から知っているが、彼女のこんな微笑みをみたのは初めてだった。

……応援しよう。

琴音はそう心に決めた。

どうせ叶いもしない自分の恋慕の情で大切な親友を失うより、自分の恋心を押し殺して、友情を守り抜いた方が良いに決まっている。

そう思った琴音は、必死に口角を上げ、菜々に微笑みかけた。

「……菜々、私応援するから。頑張ってね」

「ありがと。ことちゃんなら、そう言ってくれるって信じてた」

無邪気な笑顔を浮かべる彼女を見るのが、辛かった。

しかしその決意は、彼女が思う以上に、あまりにも厳しいものだった。

昼休み。琴音が菜々を迎えに行くたびに見せつけられる、仲睦(むつ)まじい親友と想い人の姿。

毎日のように聞かされる、想い人との惚気(のろけ)話……。

駄目。応援するって決めたのは、私じゃない――そう思いながら菜々に接し続けるのは、酷く精神的苦痛を伴(ともな)った。

そんな日々を繰り返していく内に……いつしか琴音の心に黒い感情が芽生えていったのは、当然の事なのかもしれない――。

第十七話

それから約一年後の始業式。三人には転機が訪れる。

秀樹と菜々のクラスが離れたのだ。

多くの生徒が通う高校。只単に運が無かっただけのか。それとも、普通の男女より仲の良い二人を疑った、先生達の策略なのだろうか？　――真相は、闇の中だ。

玄関付近にでかでかと貼られているクラス発表の紙を見て、菜々は残念そうな声を上げる。

仲の良い菜々と琴音の二人は、朝校門で合流した後、真っ先にここへと向かって来たのだ。

流石に早い時間だったこともあり、辺りに人は少ない。

紙を見て自分の名前を探しあてると、菜々は溜息をついた。

菜々のクラスは、二年二組。琴音は三組、秀樹は一組……と、三人は見事に分かれていた。

「残念だね、こともちゃん」

「うん。松浦君とも離れちゃうし、寂しいでしょ？」

「……ちょっと、ね」

少し間を開けて、菜々は答える。その声の調子は、いつものそれより低い。

どこか寂しげな笑みを浮かべる彼女を見て、喜んでしまう自分が嫌で、琴音は無意識に強く握り拳（こぶし）を作った。

「来年こそ、三人で一緒になれるといいね！」

「うん。だよね」

口から出る言葉は、驚くほど無機質な物で……琴音は、菜々に自分の感情が読み取られまいかと不安で仕方が無かった。

それから数カ月後。夏休みに入る少し前に、学校全体は揉（も）める事になる。

各クラス一名ずつの、文化祭の実行委員決定――活動は、夏休みも返上して行われる為、余程行事に力を込めている人物でない限り避けられる役割だ。

そういう場合は、大抵気の弱い者――菜々のような存在が、標的（ターゲット）となる。

“先生！　実行委員は、速水さんが良いと思います！”

クラスの中心格の少女の一言により、自分が文化祭実行委員に選ばれてしまったと菜々は言った。

本当はやりたくないのだろう。彼女は、困ったような笑みを浮かべていた。

「でも、折角選んでもらったんだし……頑張らなくちゃね」

その頃、秀樹と菜々はクラスも離れ、軽く疎遠状態になっていた。

それと同時に、彼女に対する黒い思いも段々と薄れていた琴音は、昔から不器用な親友を放っておく事が出来なかった。

実行委員は琴音のクラスでもなかなか決まらず、揉めていた事だ。

夏休みの雑務と親友の苦しみを天秤にかけ――琴音は、前者を選ぶ。

「菜々だけじゃ頼りないよ。しょうが無いな……私も実行委員入ったげる！」

「本当？　ありがとことちゃん！」

琴音の言葉を聞き、菜々は天使のような笑顔を浮かべる。

そんな彼女の笑顔を見て、琴音もまた幸せな気持ちになるのだった。

この決断は、後に大きな影響を及ぼす事になる――。

それは、本当に偶然だった。

各クラスの実行委員が決まり、初めての集まりの日。

二人は、あらかじめ指定されていた教室に入った。

集合時刻が近いだけあって、そこには既に殆どの人が集まっており、各々雑談を交わしていた。もう少し早く来るべきだったか――と軽く後悔する。

琴音はきょろきょろと辺りを見回してみるが、委員長らしき姿は見受けられない。まだ来ていないらしかった。

……と、その時。琴音は、視界に見知った姿を捕らえる。

あれって、もしかして――。

「……ねえ、ことちゃん。あれって、松浦君だよね？」

菜々が琴音に囁く。どうやら、彼女も気付いたらしい。

その声は、驚きと喜びが入り混じったものだった。

彼の顔を見て、微笑みを浮かべる菜々を見つめながら、琴音の心には、再びざわざわとした物が湧きあがっていた――。

そんな時、秀樹の視線がこちらを捕らえる。

二人――主に、菜々を見つめると、小犬のような人懐(ひとなつ)っこい笑みを浮かべ、こちらへと近づいて来た。

「速水と塚本じゃん！　二人も実行委員？　偶然だな！」

「うん、そうなの！　久しぶり！」

「偶然だね。宜しく」

秀樹とは出来る限り関わらないようにしよう、という琴音の決意は、彼の一言であっけなく裏切られる事となる。

その時、乱暴に引き戸を開ける音とともに、教室に一人の少年が入ってきた。

雰囲気から察するに先輩――それも、実行委員長らしかった。

彼は教卓の前に立ち、男特有の低い声で教室中に呼び掛ける。

「実行委員。学年ごとに分かれて、席に着け！　三年が窓側。二年が真ん中。一年は廊下側だ」

彼の言葉で、それまでざわついていた教室内がシンと静まりかえる。まさに鶴(つる)の一声だ。

「……二年の席、あっちみたい。行こうぜ」

秀樹の囁き声で、三人は真ん中の席へと移動した。

委員長の話によると、仕事は学年ごとに執り行われるらしい。

それで学年ごとに分かれたのか――と、琴音は納得する。

二年生は全部で四クラスある。つまり、計四名の委員がいるという事だ。

琴音と菜々と秀樹以外のもう一人の委員は、気の弱そうな男子だった。

名前は確か――白川登。

去年同じクラスだった筈だが、影の薄いタイプで、あまり関わった事はない。

恐らく、菜々と同じように、クラスの中心格の者に押し付けられたのだろう。

「二年生には主に教室、及び西校舎のエリアを担当してもらう。大まかな仕事は、先程説明した通りだ。詳細は、その都度連絡する」

実行委員に説明を受け、取りあえず今日は解散となる。

これからまた二人の仲良さ気な様子を見なければいけないのかと思うと、琴音は気が重くてしょうがなかった……。

こうして、琴音の受難の夏休みは幕を開ける――。

第十八話

七月某日（ぼうじつ）。夏休みが始まってすぐ、委員達は招集された。

部活動がある者も、基本はこちら優先だ。

部活動に所属していない琴音と比較的活動の緩い文化部に属する菜々はともかく、陸上部の主将も兼任している秀樹にとって、それはかなり厳しい物だろう。

しかし、当の本人は笑いながら“何とかなるだろ”の一点張りだった。

それがどんなに大変な事か――中学生時代から運動部の経験など皆無（かいむ）の琴音に、理解出来る筈も無かった。

全委員達の集まりの後、四人は、主に二年が活動を行う場所となる、第一図書室に集まった。

少し余所余所（よそよそ）しい空気の中、秀樹が和（なご）やかな笑みを浮かべたまま、口を開いた。

「――じゃあ、まずは自己紹介といきますか。……といっても、大体お互いの事は知ってると思うけど。俺、一組の実行委員、松浦秀樹です。これからよろしくな」

「に、二組実行委員の速水菜々です。足引っ張っちゃうかもだけど、

これからよろしくお願いします」

「三組の塚本琴音です。よろしく」

「四組の白川登です。……その、よろしく」

菜々も、白川とはあまり縁が無いようだ。きょとんとした顔をしている。

秀樹は同じ男子だからか、流石に知っているようだ。

おどおどとした態度の彼とも、親しげに接している。

「それじゃ、まずは装飾用の花作りといきますか。皆作り方、大丈夫？」

「私は平気。菜々も出来るよね？」

「うん。一応は」

そんな中、白川だけは困ったように眉根を寄せていた。

それにいち早く気付いた菜々は、彼に小さく微笑みかける。

こういう細かい気配りの出来る所は、彼女の長所だろう。

「あ、よかったら、私教えようか？　こういうの、結構得意なんだよね」

「え……あ――助かる」

白川は少し緊張しているようだったが、菜々の纏(まと)うふわふわとした空気で、それも解けつつあるようだった。

そんな和やかな雰囲気の二人を見つめ――秀樹は、どこか複雑そうな表情をしていた。

そして、それを見つめる琴音もまた、複雑な心境だった。

「――でね、ここをこうして……」

「あ、さんきゅ」

菜々の丁寧(ていねい)な指導に、白川はたじたじとなっている。

あまり女子慣れしていないのも原因の一つだろう。

そんな彼が、可愛らしい顔立ちをしており、思いやり溢(あふ)れる少女の菜々に惚れていくのは、時間の問題だった――。

夏休みも半ばにさしかかると、運動部では大会や合宿などが増えていく。

そしてそれは、陸上部も決して例外ではなかった。

流石に大切な大会などを主将が抜けるわけにもいかず、必然的に秀樹が委員会に現れる時間は減っていった。

それが、徐々に四人の関係をこじらせていく……。

その日は珍しく、秀樹も活動に参加していた。

彼曰く、今日は珍しく通常練習だから、少し早目に終わらせてきた――との事だ。

その割には、殆ど息は乱れていないのだが。

相変わらず秀樹は、思い人の姿を、目で追っていた。

しかし彼は、少女の隣に居る少年が視界に入ると、不快気に眉根を寄せた。

「ねえ、白川君。この書類の整理、手伝ってくれないかな？」

「分かった」

「――」

この頃、秀樹があまり活動に現れなかったせいか、白川と菜々の仲は急速に発展していた。

白川が菜々に好意を持っているのは、傍目から見ても明らかだ。

適当に人付き合いをこなす琴音とは対照的に、生来面倒見の良い菜々。

例え彼女にその気がなくても、周りに誤解を与えてしまうのは、仕方のない事なのかもしれない……。

「――もと、塚本」

「……え？」

考え事をしていた琴音は、呼びかけられている事に気が付かなかった。

顔を上げ、声がした方を向くと、無理に微笑みを浮かべた秀樹が琴音を見やっていた。

「書類整理は白川達に任せて、俺達は荷物運びに行こうぜ。ここにずっと立っていても、邪魔なだけだろ？」

「……うん、そだね。行こっか」

「ああ。白川、速水。後は宜しく」

そんな二人のやり取りを見やり、今度は菜々が切なげに眉根を寄せる番だった。

想いはどんどんすれ違い……二人の溝（みぞ）は、どんどん深まっていく――。

第十九話

琴音と秀樹が訪れたのは、様々な用具の置かれた体育倉庫だった。

本来なら、体育祭用の物だけが仕舞われてある筈の場所だが、予算の関係上なのか、文化祭用の道具も結構置かれている。

この倉庫の整理もまた、琴音達委員の立派な仕事の一つなのだった。

……とはいえ、昼間でも薄暗く、何処か不気味な此処（ここ）。

近寄りがたい雰囲気を漂（ただよ）わせている為か、二人以外の姿は見られなかった。

「ゴメンな、塚本。こんな所連れて来ちゃって」

「あ、ううん。大丈夫」

先程の事が原因らしく、秀樹が酷く落ち込んでいるのは、琴音の目から見ても明らかだった。

少し物憂（ものう）げに瞳を伏せ、彼はぽつりと溢す。

「……速水ってさ。白川の事、好きなのかな？」

「――」

その言葉は、琴音に問いかけている――というよりは、自問自答

をしているようだった。

恐らく、此処に来た本当の理由は、仲良さ気に話す二人の事を見ていられなかったからなのだろう。

そしてその気持ちは、琴音にも痛いほど分かる。

昨年の二人の事を思い出し、琴音はちくりと胸が痛んだ。

「塚本、速水の親友だよな？　……何か、聞いてない？」

「――っ」

流石の琴音も、とっくに気付いていた。

彼の向ける視線が、主に親友に注がれていた事に――。

自分では駄目なんだ――と、頭では理解していても、実際彼の態度を見せつけられるのは、やはり悲しかった。

内心の動揺を隠し、琴美は冷静を装った。

「――ゴメン。何も聞いてないや」

「そっか。……悪い、変な事聞いちゃって」

そこまで言い終えると、秀樹は無理矢理口角を上げる。まるで、去年の琴音のように。

困ったように眉根を寄せながら、彼は言った。

「折角来たんだし、そろそろ仕事しようぜ。……って、仕事始まんなかったのって、俺のせいか――」

「無理して、笑わなくていいよ」

「え？」

明るい調子で声を上げる秀樹を、琴音は静かに制す。

再び無表情に戻った彼に、琴音はそっと諭した。

「――私、分かるから。大好きな人が、自分以外の人と仲良くしてるのが、どんなに辛くて、悲しい事なのか……」

「――」

秀樹は何も言わない。

彼は自分の気持ちに気付いているのか、いないのか――それは、琴音にも分からなかった。

黙り込んでしまう秀樹を前に、琴音は更に言葉を続ける。

「そういう時は、無理して笑わないで。……辛かったら、泣いても良いんだよ？　私、誰にも言わないし」

「……さんきゅ。俺なんかの事、気にかけてくれて」

彼は泣かずに、小さく微笑む。

しかし琴音にはその笑顔が、静かに涙を溢(こぼ)しているように見えた――。

その日の帰り道。いつも通り、菜々と一緒に下校していた琴音は、彼女に詰(つ)め寄る。

「どういう事よ、菜々。ちゃんと説明してくれる？」

「……え？　ことちゃん、急にどうしたの？」

「――分かってるくせに」

琴音がそこまで言っても、菜々には思いあたる節がないらしい。

小首を傾げながら、琴音を見やっていた。

そんな親友に向かって、琴音は静かに告げる。

「……松浦君との事に決まってるでしょ？　彼がいるのに、どうして必要以上に白川君と仲良くしているの？」

琴音の怒気(どき)を孕(はら)んだ言葉に、菜々は思い切り慌てた。

「わ、私別に、そういう事を思ってるわけじゃなくて……」

「じゃあ、あの思わせぶりの態度は何！？　あれじゃあ、松浦君にも白川君にも誤解を与えちゃって当然だよ！　そんな中途半端な気

持ちのまま、二股でもかけるつもり？」

「そ、そんな事しないよ！」

そこまで言うと、流石の菜々も辛くなったらしい。

悲しげに眉根を寄せている。

そんな親友の煮え切らない態度が嫌で、琴音はついつい声を荒げる。

「じゃあ、そのどっちつかずの状態を何とかしなさいよ！　このままじゃ、松浦君も白川君も可哀想よ！」

「それは――」

そこまで言うと、菜々の瞳にはじわりと雫が滲む。

菜々の困った事があるとすぐに涙を溢す癖は、昔から変わっていない。

これ以上泣かせると色々と面倒な事になると思った琴音は、少し語調を緩め、言葉を続ける。

「――ゴメン、少しキツく言いすぎたかも」

「……ううん。私こそ、優柔不断のせいで、ことちゃんの事やきもきさせちゃってゴメン。これからは、ちゃんと注意するね」

目尻を軽く拭いながら、菜々はそっと微笑んだ。

第十九話（後書き）

全く話が進まない&グダグダストーリー&前回同様短めですｏｒｚ

すみません（汗）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4081z/

沢内探偵事件録　女子高生ストーカー事件

2012年1月9日02時47分発行